

ダンス指導で求められる教師の資質・能力に関する研究—語りの質的検討—

谷川沙也歌・酒向治子
(岡山大学大学院教育学研究科)

1. 研究の背景・目的

学校教育のダンス領域は、社会の趨勢を受け様々な変革を遂げてきた。1989年の男女選択履修化を経て2008年には男女必修化(中学1・2年)へ、また1998年にはリズムダンス(「リズムダンス」や「現代的なリズムのダンス」)が新たに加わるなど、制度・種目ともに拡大の様相を見せている。

その一方で、ダンス授業の実施には常に、学習内容・指導法に関する教員の困難さが付き纏ってきた(中村2009)。先行研究においては、それらの解決策として、授業内容の明確化・適切な指導法の確立・研修会の拡大、更に、ダンスを専門とする外部講師の導入も積極的に挙げられている(望月2016)。

上記の外部講師導入の背景には、「ダンスの実技経験が有ればダンスの授業ができる」という技能偏重主義的思想が見て取れる。しかし、ダンススタジオ等とは違う性質を持つ学習者に指導を行うための資質・能力として、その実技経験が十分な担保となり得るのかは疑問が残るところである。

学校教育におけるダンス指導者に求められる資質・能力として、先行研究では、その授業形態や、学習者の多様な動きを引き出すための声掛けや演示が大まかな課題として指摘されている。しかし、その具体性が明らかとは言い難く、指導の基層となる、学習者との関わり方への着目は不十分である。したがって本研究では、指導実践者の語りを通し、学習者との関わり方を考究することにより、ダンス指導に必要な資質・能力のより詳細を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

詳細は以下の通りである。

研究アプローチ: 質的アプローチ(M-GTA)による事例研究。

研究対象者: 大学の教員養成課程に属し、15年以上のダンス経験を有する3名。

◎対象者A(女性・25歳・ダンス歴21年)

◎対象者B(女性・23歳・ダンス歴20年)

◎対象者C(女性・21歳・ダンス歴15年)

実践及びインタビュー期間: 2019年7月～11月

研究の流れ:

- (1) 0大学に所属する約70名の被験者を、ダンスへの態度(好感度・抵抗感・羞恥心)を問う質問紙調査によって平均化し、3群にグループ化を行う。
- (2) A・B・Cが同一プログラム(注)を用いた授業を2回ずつ施行する。
- (3) それぞれの実践から約1週間後に、記録した映像をもとに再生刺激法によるインタビューを実施、その逐語記録の分析を行う。

3. 結果

本稿では省略、大会当日に発表予定。

4. 考察

本研究の事例から、ダンス指導には、単なる指導技術のみならず、自己・他者に対する自他意識が大きく関与していることが伺えた。

【主な参考文献】

- ・中村恭子(2009)「中学校体育の男女必修化に伴うダンス授業の変容:一平成19年度,20年度,21年度および24年度の年次推移から一」『日本女子体育連盟学術研究26号』日本女子体育連盟
- ・望月拓実(2016)「中学校体育授業における外部指導者の有効性と導入方法の検討—現代的なリズムのダンス授業を例として—」早稲田大学大学院スポーツ科学研究科

【注】同一プログラムには、ダンス領域の中でも一番実施率が高く、その困難性を除くことが喫急の課題であるリズムダンスの教材(「リズム系ダンスのための新しい支援教材①～白桃ダンス～」監修:酒向治子(2014))を使用した。